
えとの丘

雪樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えとの丘

【Nコード】

N2742L

【作者名】

雪樹

【あらすじ】

4兄弟が経営する小さな洋風レストラン
そこを舞台にしたハートフルストーリー。
噂を聞き付けたお客様で賑わう店内はたくさんの幸せとちょこっと
だけの切なさで溢れる。

「いらっしやいませ。“えとの丘”へようこそ」

家族の絆や四通りの愛の形。

忙しくも幸せな日々はすぐそこにあった。

遅くなって申し訳ありません（泣）

プロローグ

そこは閑静な住宅街だった。

ここに一つのレストランがある。

“えとの丘”という洋風レストラン。

近所ではちよつと名の知れた有名スポットでもあった。

それというのも、このレストランを経営しているのがそこら辺のアイドルよりずっと美形の兄弟なのだ。

長男の高原寅之助へとのすけ、20歳。

次男の卯紺へうこん、19歳。

三男の未礎へみき、15歳。

四男の酉へみのる、13歳。

この4兄弟は生まれた年の干支にちなんだ名前をつけられている。

店の名前の由来は、干支と兄弟という意味で“えと”、苗字の“高原”（高い所にある原っぱ）Ⅱ“丘”で合わせて“えとの丘”というわけだ。

そんな少し不思議なレストランは、噂を聞いてやってくるお客様で賑わいを見せる。

「お待たせいたしました。“えとの丘”へようこそ」

menu☆1

目覚ましの音が響く。

時計の針は6時をさしている。

『今日は日曜：か。準備しなくちゃ：』

まだ眠い目を擦りながら、最初に起きたのは三男の未礎だった。

高原家は一階が“えとの丘”のレストランになっていて、二階三階は住居として使っている。

着替えを済ませ、未礎は一階に降りるとレジに近付く。

「おはようございます。父さん、母さん」

穏やかに笑う未礎。

そこに飾られている一枚の写真。

その写真は、四兄弟の両親が写ったもの。

そつとそれに触れる未礎の表情が穏やかなものから、難しい顔に変わる。

「…遅い…」

この時間、本来なら兄弟四人で支度をするというのに、残り三人が起きてこない。

「…はあ」

ため息しか出てこない。

未礎は仕方なくもう一度三階に戻り、順番に兄弟を起こすこととなる。

そもそも、四兄弟の中で一番しっかりしているのが未礎だった。

そして、三階に着くと長男である寅之助の部屋へ向かう。

扉をノックしても、返事はなく起きていないことがわかる。

迷うことなく部屋へ入り、未礎は寅之助を揺すった。

「寅兄、朝だから起きてよ」

「んー？まだ暗いよ、真っ暗」

もぞもぞと布団が動く。

「：お願いだから朝から変な事いわないでよ。布団かぶってれば、そりゃ暗いよ」

「えー？あ、本当だ、おはよう未礎」

やっと布団から顔が出てくる。

「おはよう。ほら、俺紺兄と酉起こしてくるから先に支度してて」

「了解しましたあ」

長男の寅之助は名前に似合わず、かなりマイペースでたまにわけのわからない天然が飛び出す。

それでいて、一応は“えとの丘”のオーナーであり、腕利きの料理人でもある。

未礎が部屋から出ていき、寅之助も支度を済ませると、一階のレストランまでおりていった。

そして開店の準備や料理の下準備をするために厨房へ入る。

「つと、そうだ」

いって一度レジまで戻った。

「おはよう、母さん、父さん。今日も美味しく作れるよう頑張るよ」
寅之助は優しく微笑み、再び厨房へ入った。

その頃未礎は四男の酉を起こしに行っていた。

「ほら、起きろって」

「もう少しだけ寝かせて！お願い、お兄ちゃん！」

可愛らしく布団の中でいう四男酉。

それに対して、一つも表情を変えずに布団をひっぺがす。

「：俺には通用しないって何度もいってるだろ？家族以外の人間にしかそのブリッコは効かないよ」

「ちえ。いいじゃん、少しくらい」

「はいはい、起きて寅兄の手伝いにまわって」

未礎に促され大きく伸びをしてから、酉は身支度を済ませ寅之助のもとへ向かった。

「おはよう、母さん、父さん」

先の二人のように、酉も写真の両親にいった。

未礎は最後に次男卯紺の部屋へとやってきた。
布団から出ていた腕を叩く。

「紺兄、起きてよ。寅兄だけじゃ、必ず余計なことやらかすら…」
そういいかけた時だ。

一階から何かが崩れ落ちるような物凄い音がした。

「ほら、いつてるそばから…」

太陽の眩しさに腕で目を覆って、卯紺が起きた。

「あー、めんどくせーな。寅兄を先に起こすからだ。未礎、先にいって片付けとけ」

そう未礎にいう卯紺。

「…なんていつて、二度寝したらダメだからね、紺兄」

「……へいへい」

未礎にはすべてお見通しで、卯紺は起きざるを得なかった。

卯紺がちゃんと起きたことを確認して、一階におりた未礎の目に入ったのは、兄弟の中で一番背の低い酉が必死に高い位置にある戸棚を必死に押さえる姿だった。

「あ！未礎兄！助けて！」

「な、な、な、何やったんだよ、寅兄！」

「いいから早く助けてよー！」

「あ、ああ」

背伸びして耐えていた酉に代わりに、長身の未礎が棚を押さえる。

「腕疲れたあ」

酉が手を振りながらいう。

「それで、酉。いったいどうしてこういう状態になったんだ？」

「僕もよくわかんないよ！僕の担当は店内の飾りつけなんだから！そしたら寅兄がいきなり！」

酉が視線を足元へと移す。

同じように未礎も見ると、そこには寅之助が倒れていた。

「……またですか、寅兄……」

日常的にはあまり使わない調理器具の下敷きになる寅之助に未礎はいった。

戸棚の留め具が寅之助の横に転がっている。

酉にそれをとってもらうと、未礎はしっかりとめると床に散らばる道具を流し台に置いて、ため息をつく。

「寅兄、掃除は俺の役目だからいいっていつもいってるじゃん」

ホウキを握りしめて倒れている寅之助に手を差し伸べる未礎に、寅之助は情けなく笑う。

「だって、未礎は卯紺や酉起こすので忙しそうだったから代わりに
と思って……」

「代わりにやろうとして余計なこととしてちゃんあ。どーせ、またホウキでも振り回して留め具が取れたんだろ」

支度を済ませた卯紺がいつの間にか厨房の入り口にいた。

「……おはよ、父さん、母さん。寅兄がよけーなことやらかさないよ
うに、ちゃんと見とけよな」

卯紺もまた、その場からも見える写真にいう。

そして穏やかに笑っていた。

「……さてと」

卯紺が呟くようにいって、厨房を見る。

「どうすんだ、未礎。朝飯はお前の担当だろ」

「朝御飯の前に片付けだよ。寅兄も紺兄も料理できるんだから、自分等で作って食べてよ」

テキパキと片付けをしながら未礎がぼやく。

「俺も寅兄も洋食専門。朝は絶対和食だ」

「紺兄ってば、また文句いってるし」

酉がいう。

「そうだね、朝はやっぱり和食かなあ。未礎は俺達と違って和食専門だもんね」

「誰の性でこんなドタバタしてると思ってるのー？」

「とにかく、俺が片付けるから寅兄と紺兄はこの状態で準備できる
こととして。酉はお店の飾りつけを続けて。片付け終わり次第朝食は
作るから」

ため息をつきながらも、指示を出して兄弟を動かす。

「了解」

「はい！」

「……………」

「…紺兄」

「へいへい」

それから小一時間して、朝食ができあがった。

「あー、食った食った」

「やっぱり未礎兄のご飯はおいしいね」

「未礎が料理学校出たら、和食メニューも加えようね」

「いいから片付けてよ。いつもより準備遅れてるんだから…」
皿を下げながら未礎がいった。

と、未礎が一度立ち止まり酉に向き直る。

「…酉、そのうち料理教えるよ。今日みたいなことにならないよう
に」

「えー?! いいのー?! やったね!」

キャッキヤとはじゃく酉に、未礎は穏やかに小さく笑った。
が、その表情が卵紺の一言に一変する。

「あ、お前ら今日は絶対出かけんなよ。特に二時から四時の間」
突然の卵紺からの命令に、未礎は嫌な予感がしてならなかった。
恐る恐る「…何で?」と聞き返す。

「雑誌の取材。兄弟四人でいる時について頼まれてっから」
シラッという卵紺に未礎は青くなる。

「二時から四時って一番お客さんが多い時間なのに…どうしてそん
なことになってるわけ?」

「あ、わかった! 紺兄ってば女の子が多い時間をわざと選んだんだ

「！」

「おー、よくわかってんじゃん酉。とにかく、そういうわけだから」
「まったく、卯紺ってばー」

いいながら笑う寅之助。

少々天然でおっとりした長男、寅之助。

自己中心的な次男、卯紺。

兄弟の中で一番真面目でまともな三男、未礎。

中性的な容姿でブリッコの四男、酉。

四人とも雰囲気はまったく違うというのに、共通して多くの女性から指示を受ける。

こんな四人だからこそ余計に目立ち過ぎるのだった。

卯紺が勝手に引き受けてしまった取材に、一番気が乗らないのは未礎だった。

笑うことや、そもそも人と関わるのが苦手なのだ。

「大丈夫？ 未礎」

「そーだよ。紺兄は単に目立ちたいだけでしょ？ 未礎兄のこと考えてよー」

「とかいって、酉。おめーだって、取材受ける気満々だろ」

「そりゃ、僕の人氣がまた上がるし？」

「え？ 取材受けると人氣者になれるの？」

「あー、もういいよ。いいから片付けしてって」

朝っぱらから、未礎はこの日一日がとても憂鬱になってしまった。

menu☆2

朝八時。

“えとの丘”の開店だ。

酉が店の看板を出し、ドアに掛けてある札を“close”から“open”に返す。

「いらっしやいませ！」

酉が明るくお客を迎える。

土日だけは朝八時から朝メニューで店を開けている。

兄弟を幼かった頃から知っている近所のおじさんおばさんはまるで我が子を見守るように、朝も早くからやってくる。

「おじさんは、いつものセットでいいんだよね？」

「おお！何だあ？今日は末坊がオーダーとるんか？」

カウンターに座ったこのおじさんのいう“末坊”は酉のことだ。

「うーん、何かねえ、未礎兄朝から疲れちゃったの」

「何だあ？またお前らなんかやらかしたのかあ？」

そんなことをいいながら、おじさんは大口を開けて笑った。

「お待たせいたしました。セットのコーヒーでございます」

と、セットのコーヒーを持って未礎がくる。

「なんだ、ちゃんというじゃねーか！いやー、お前も大変だなあ！」

未礎がちゃんというのを見ておじさんがいった。

「ごゆっくりどうぞ」

「おい、未礎。いくら昔からの馴染みだからって、もうちっと愛想よくできねーのかよ」

卯紺がいつて顔を出す。

「いんだいんだ！未礎、気にすんなよー、あんな兄貴のいうことな
んか！」

「ハハハ…」

未礎は無器用に笑うことしかできない。

「卯紺と酉と未礎を足して三で割ったらいいかも」

ヒョッコリと今度は寅之助が顔を出した。

「ブリッコの未礎に、真面目な卯紺に、自己中な酉。うん、変だね！」

寅之助の言葉に三人はそれぞれ反論した。

「真面目になんかやってられるか。気楽に生きたもんが勝ちだ。未礎は真面目すぎだしな」

「うるさいよ紺兄。それに余計なお世話だよ。ブリッコは酉だから大丈夫なんだ。俺には無理な話だよ」

「確かに未礎兄には無理かも。僕みたいに可愛くないとね！それと僕は自己中なんかじゃないからね！」

そういいながら三人の視線は寅之助のもとへ集まった。

「…まあ、一ついえるのは」

「寅兄の天然だけは」

「欲しくないよね」

「俺、天然じゃないよ？あ、でも、どんなに頑張っても自分は自分だもんね、うん！」

自分から持ち出した話題を勝手に納得して終結させた寅之助に残る三人の弟はため息をつく。

「ねえ、未礎兄？どうして寅兄は自分が天然だって気付かないの？」

「いや、どうしてって俺に聞かれても…」

「そんなもん決まってるだろ。気付かないのが天然なんだよ」

「だからあ、俺は天然じゃないってば！」

兄弟のやり取りにおじさんがまた笑う。

と、扉の開く音がした。

「いらっしやいませー！」

酉がタタタツと駆けていき、客を迎える。

今度は近所に住む三人家族がやって来た。

まだ五歳の女の子は酉にとってもなついていて、店に入るなり抱きついて挨拶だ。

「うわー！久しぶりだね！」

「酉お兄ちゃんに会いにきたのよう！」

「本当に？ありがとう！」

キヤツキヤツとはしゃぐ酉と女の子の横で両親は微笑んでいた。

「お席のご用意ができました。どうぞ」

「いつもありがとう、未礎君」

「いえ、そんな。ご注文はどういたしますか？」

「久々だし、寅之助君と卯紺君に任せるよ」

「かしこまりました」

未礎が丁寧に退くと、それに代わり酉が女の子を座らせた。

「酉君もありがとう。この子本当に酉君が好きなのね」

「僕も大好きだよ！」

「あたし、酉お兄ちゃんとケツコンするのう！」

「え？！パパ寂しーぞ！」

酉はこの家族が大好きだった。

絵に書いたような“幸せな家族”。

酉はレジの所にある両親の写真に目をやる。

穏やかに微笑む両親。

『もうあの頃は戻ってこないけど、僕ら家族はいつぱい幸せをもらって生きてるんだよね。母さん父さん』

「お兄ちゃん？」

「あ、ごめん！…あと十年くらいして、それでも僕を好きでいてくれる？」

「うんっ！」

「じゃあ、僕待ってようかな！」

酉は笑う。

中性的なその容姿に似合う、可愛らしい笑顔で女の子の相手をする。

「酉も好きだな、あの女の子」

卯紺が厨房から覗いている。

「違うよ。あの家族のことが好きなんだよ、酉は。確かにあの女の

子のことも好きだけどね」

寅之助も優しい表情で応えた。

すると、また店の扉が開いて人が入ってきた。

「あ、いらっしやいませー！」

「ほら、酉君もお仕事あるんだから、おとなしくしてなくちゃダメよ」

母親が女の子をそうたしなめた。

「また今度遊ぼうね！」

「約束よう？」

「うん、約束！」

小さな手が酉の小指に触れる。

触れたその手を、そっととって酉は笑顔を向けた。

それから新しく来たお客さんの方に向かう。

「お待たせしましたー！二名様ですね：って、桃さん！…と蜜柑」

「なあに、その態度！私だって一応お客さんなんだけど！」

「お客様？また僕への嫌がらせだと思った！」

「何ですって？！」

「こらこら、蜜柑。ご迷惑になるわ」

「お席の用意できましたよ、桃さん、蜜柑ちゃん」

未礎が出てきて“彼女達”にいう。

彼女達もいわゆるご近所さんで、四兄弟とは幼馴染みだった。

彼女達、香野桃と妹の蜜柑。

桃は寅之助と同じ年であり、中学生時代からの恋人だ。

妹の蜜柑は酉と同じ年で、今は同級生記録を更新中だ。

それというのも、酉と蜜柑は幼稚園の頃から一度も違うクラスになったことがないのだ。

これを腐れ縁というのか、そのせいか二人は喧嘩ばかりしている。喧嘩する程仲がいいという言葉がピッタリの二人だ。

結局のところ、良くも悪くも互いを理解しあっているのは確かだ。

「寅兄、呼んできましたようか？」

未礎はイスに座った桃にいった。

「ありがとう未礎君。でも寅ちゃん、お仕事あるからいいわ」

「そうですか？あ、いつものブレンドでよろしいですか？」

「ええ」

桃は静かに笑っている。

「蜜柑ちゃんは紅茶でいいのかな？」

「はい！あの、できれば未礎君にいれてほしいです！」

「かしこまりました」

未礎が無器用に笑って奥へ引つ込むと、酉は蜜柑をどついた。

「いったあ！何すんのよ、バカ！」

「未礎兄の前でだけ可愛くしようなんて無駄だよーだ！諦めた方がいいんじゃないの？」

「酉には関係ないでしょー！！」

「：またやってるぞ、あの二人」

「あはは、仲のいい証拠だよ。さてと、桃はブレンドで蜜柑ちゃんはまた未礎に頼んだみたいだね」

卯紺と寅之助は厨房で話していると未礎が入ってきた。

「オイ、未礎。あいつら止めてこい」

「俺が出ていくと酉が嫌な想いしちゃうよ。酉はあれで鈍いから、蜜柑ちゃんの本当の気持ちに気付いてないんだ」

いいながら、未礎は紅茶をいれる。

「つまり、それは遠回しに俺に行けっていつてんのか？」

「その方がいいっていつてるんだよ。二人のためにもね。はい、蜜柑ちゃんの紅茶」

「それと桃のブレンドも」

「ちっ、めんどくせー」

そういいながらも、紅茶とブレンドコーヒーを受け取り、卯紺は香野姉妹と酉のもとへ向かう。

「お待たせしました」

「あら紺君。未礎君に頼まれたのね」

桃は小さくいった。

「まあな。あいつは色々と敏感だからな」

コトツとカップを置く音でやっと言い合っていた二人が卯紺の存在に気付いた。

「あれ？何で紺兄が運んでるの？未礎兄は？」

「未礎は今会計やってるんだ。オメーがいつまでもサボってるせいで、俺までウェイターやってんだよ」

「だって、蜜柑が！」

「酉、いくら幼馴染とはいえ、女の子のせいにするなアホウ。本当のかつこよさはそこにある」

「何それ！いいもん！僕はかつこよさより可愛さだもん！」

「へいへい。まあ逢い引きも程々にして仕事に戻れよ」

「あ、あ、あい…びきい？！何いつてるのさ、紺兄！」

ヒラヒラと手を振りながら、卯紺は厨房に戻っていく。

「やっぱり卯紺さんの方が一枚も二枚も上手ね。酉じゃまだまだ勝てないってことよ！」

「蜜柑はいつも一言多いんだよ！」

いって酉は未礎の所へ行って場所を代わった。

最初に来たおじさんが会計をすませて帰っていった。

それから少しして三人家族も帰っていく。

帰り際、女の子は寂しそうに酉を抱きしめ、何度も振り返りながら歩いていた。

menu☆3

三人家族が帰ると、店内は四兄弟と香野姉妹だけになった。

「寅兄、お皿洗いは僕達でやるよ？」

「他にお客様もいないし、桃さんと話でもしてなよ」

「でもお…」

「でもじゃねーよ。早く行けっての。寅兄を待ってんだから」
半ば追い出されるような形で厨房から放り出された。

「寅ちゃん？お仕事は？」

「それがあ」

「一通り終わりましたので、あとは大丈夫ですよ」

「桃達はゆっくりくりしてろ」

声だけが飛んでくる。

桃はクスクスと笑う。

つられて寅之助も笑った。

「本当に素敵な弟さん達ね」

「蜜柑ちゃんには負けるかな」

いつの間にか、桃の隣にいた蜜柑の姿は消えていた。

「優しいね、蜜柑ちゃん」

未礎がそつといった。

「ったく。オイ、酉。ポケットとしてるといつか取られちまうぞ」

卯紺も続く。

「何いってるのさ、紺兄！」

すかさず酉の顔が赤くなる。

当の蜜柑はそれに気付かぬふりをして未礎の皿洗いを手伝った。

『…蜜柑ちゃんだって早く気付いてほしいよね』

未礎は静かに微笑んだ。

「ごめんね、いつも来てくれるたびに手伝ってもらって」

「いえ、いいですよ！未礎君や卯紺さんの力になれるのでしたら、何でもやります！」

「そりゃ、助かるな。高校に上がったら、ここでバイトすっか？」

「ええ！いいんですか？！」

「ダメ！絶対ダメ！」

卯紺の突然の提案に酉は焦りまくりだ。

「何だよ、本当は嬉しいくせによ」

『そりゃあ、嬉しくないっていったら嘘になるけど……っていったら、お兄ちゃん達余計にからかってくるだろうし』

そんな風に考えていると、未礎が横からいった。

「紺兄、あんまり酉をいじめちゃダメだよ」

「ったく、未礎は酉のこと心配しすぎなんだよ」

「うん。でも大丈夫。紺兄のことは心配してないから、これっぽっちも」

未礎は皿洗いを終え、手をふく。

と、店の戸が開いた。

「いらっしやいませー！」

酉が慌てて出ていくと、そこには一人の女性が立っていた。

「李杜夢さんじゃないですか！」

「おお、酉の出迎えなんて、久しぶりだね」

この女性、柳葉李杜夢やなぎはりすむは卯紺と同じ年。

なんというか、女性というより、下手すれば男性よりたくましいかもしれない。

「何だい、酉の彼女と寅君の彼女も呼ばれたのかい？あれ？未礎の彼女は？」

「李杜夢さん、“アイツ”は俺の彼女じゃないですよ」

未礎は苦笑いして出てきた「そうかい？でも好きなんだろう？」

李杜夢はいつて未礎の頭を撫でる。

未礎はそんな李杜夢に小さく笑いかけた。

「卯紺さん、いいんですか？」

「何が？」

「だって、彼女さん来たみたいですよ？」

「彼女…ねえ。俺ならアイツよりもっと女らしい彼女がいてもおかしくねーのになぁ。何でよりによってあんなガサツな女に…」

「誰がガサツだって?!」

卯紺の声に反応して、李杜夢が厨房に顔を出した。

李杜夢と目が合った卯紺は、小さく溜め息をついた。

「何だい、そね溜め息は！」

キッと李杜夢が卯紺をにらむ。

そんな李杜夢に卯紺は誰も気付かないくらいに小さく笑う。

『一番のアホは…こんな女に惚れちまった俺…なんだけどな』
珍しく優しい表情を見せた卯紺。

もちろん、たった一瞬だ。

すぐにいつもの調子に戻る。

「んで、来るの早すぎやしないか。俺に早く会いたいからとか？まさかなぁ、お前に限ってそんなことねーか。そんな可愛らしいことするなんて、なぁ？」

「何が“なぁ”だよ。…会いたかったのさ、卯紺に。別にいいだろう、たまには…」

「…李杜夢…」

「……………なんていうと思ったか、バカたれ！」

李杜夢はいつて、“ベーツ”と舌を出した。

そしてニツとイタズラに笑って見せる。

「テメー、マジ可愛くねーんだよ！」

二人の間で勃発した口喧嘩に、未礎は小さく溜め息をついた。

『…相変わらずだなぁ…』

「紺兄だって結局好きなんじゃないか。…ねえ、未礎兄」

「ん？どうしたんだよ、酉」

「…僕にも見つかるかなぁ。僕だけの家族…」

「西…」

両親の写真に目を向けた西の顔はとても寂しそうで、未礎はそんな西の頭を軽く叩いた。

「大丈夫、ちゃんと見つかるよ。西だけの大切な家族が、見つかる。きつとそれは、西のすぐそばで…」

「…そうだといいなあ。だって家族は増えていくから楽しいんだよね！減るんじゃないよ…増えるんだよ…」

『西…』

未礎はチラッと蜜柑を見た。

蜜柑は小さく微笑んで、西に駆け寄る。

『…家族…か。そうだね、増えていくのは嬉しいことだね。…父さん、母さん…』

ふと両親の写真に目がいく。

写真の中で両親は笑っている。

四兄弟の両親はすでに他界していた。

二年前、テレビの取材で出掛けていった帰り道、横断歩道にトラックが突っ込み、五名の命が奪われ多数の負傷者が出た。

その中に四兄弟の両親が入っていたのだ。

『あの事故で俺達のように両親を亡くした男の子…あれから、どうしてるだろう。俺には兄弟がいてくれるけど…あの子は独りぼっち…』

ふと未礎は思う。

病院に駆け付けた時に廊下で声を押し殺して泣いていた小さな男の子。

男の子自身、顔や腕などに治療の痕があった。

『…ああ、この子も…』

未礎はそっと自分の羽織っていたパーカーをその男の子にかける。

「病室に戻ろう」

すると男の子は首を横に振って答える。

「…もう、お父さんもお母さんも帰ってこないのに、“りお”まで僕のことわからなくなっちゃうなんて…。“りお”も僕の前からいなくなっちゃう…」

こらえていた声が涙とともに溢れだし、その男の子は未礎に抱きついていた。

『…今もまだ、泣いているのかな。…兄弟じゃなくてもいい。寅兄や紺兄のようにあの子を守ってくれる人がいてくれたら…』
事故の後の寅之助と卯紺の言葉を未礎は忘れない。

『弟達は俺が守っていく』

その頃十八歳だった寅之助がいった。

寅之助はもともと家を継ぐつもりだったため、料理の専門学校への進学が決まっていた。

卯紺もまた働くことができる年だ。

この二人だけなら、なんとか自立もできただろうが、未礎と酉は別だ。

この二人は遠い親類のところ、別々に暮らすことになってしまう。それを寅之助は嫌がったのだった。

寅之助だけではない。

卯紺も未礎も酉も同じ気持ちだった。

『そんなことできるものか!』

見たこともないおじさんがいう。

『俺達家族のことは、俺達でなんとかする。悪いけど弟達はやらな
いからな』

卯紺がいつて寅之助に視線を送る。

『心配して下さっているのはわかります。ですが、大丈夫です。俺が一年で勉強してこのレストランを…“えとの丘”を再開します。それまでの間は俺がバイトして稼ぐし、預金もまだあるのでなんと

かなります』

『寅兄だけじゃない。俺もバイトして、専門学校行って手伝うしな』
二人の意志は頑なで、その姿を横で見っていた未礎と酉は互いに顔を見合せ頷いた。

『俺も一生懸命手伝うよ。だから…』

『僕達はお兄ちゃんと一緒にいたいよ！だって僕達は家族なんだから！』

その後は相当もめたらしい。

それでも四兄弟は離れることなく、一緒に暮らせるようになった。

『あの時の寅兄と紺兄、凄くかつこよかった。俺と酉のことを守ってくれた。今も…』

四人で一緒に暮らすのは生半可な覚悟ではなかった。

寅之助は誰かの力を借りる訳でもなく、最初の一年をバイトと学校とで過ごし、最短で資格を取った。

そして、ある程度の準備を整えると、“えとの丘”を再開した。

料理の腕はかなりのもので、すぐに噂は広がった。

それから卵紺も加わり、今に至る。

もちろん、その影には未礎と酉だけでなく、桃や李杜夢が支えていたのだ。

「…じゃあ、やっぱり…」

「ああ、せめて未礎と酉が自由に自分のやりたい事ができるようになるまでは、俺が守るって決めたから…ごめんな、桃」

「寅ちゃんらしい。私の大好きな寅ちゃんだ。うん、私は待ってる

よ」

寅之助と桃の左手薬指にはリングが光る。

「…どうせあんたも寅君と同じなんだろ？」

「…ああ。…：悪い」

「卯紺が素直になるなんて、どういう風の吹きまわしよ。…安心しな。あんたが他の女のどこにいけない限り、私はずっと待ってるから。私はどこにも行かないよ」

それぞれの想いはあまりにも儚げなものだった。

寅之助と卯紺の二人は、未礎と酉が自立し自分のやりたいことをできるようになるまで、一緒に暮らすと決めていた。

しかし、それは桃や李杜夢を待たせるということだ。

そのことがどうにもやるせないでいた。

酉は二人の兄の心情を知らない。

どんなことが起きても家族は一緒だと、そう信じていた。

けれど未礎は違う。

兄の気持ちをちゃんと知っている。

だからこそ、未礎は自分が高校に入ったら、寅之助と卯紺を自由にあげたいと密かに思っていた。

『いつまでも一緒にはいられないんだよ、酉。それぞれの道を歩いていかなくはいけないから』

menu☆4

店の扉が開いた。

「いらっしやませー」

酉がすぐに出ていく。

「そろそろ帰るわ。お邪魔になっちゃうし。蜜柑、行くわよ」

「…うん」

「いつもありがとう。酉ー、蜜柑ちゃん帰るよー!」

寅之助の言葉に酉は振り返った。

「ありがとうございます!」

ぶっきらぼうに、しかし端から見ればとても可愛らしく、酉はいて目を逸らす。

『…ったく、もう』

そんな酉に蜜柑はため息をついて駆け寄る。

「酉! 私がいつだって傍にいるんだから! 何かあったら私が助けてあげる!」

「んなっ!? 僕は大丈夫だよ!」

「私にはわかるをだから! 酉のバーカ! じゃあ、またあとでね!」

蜜柑はそういつて桃に着いて出ていった。

「何なんだよ、あいつ。…ん? またあとで?」

後ろ姿にポツリと呟いて、酉は首を傾げる。

けれど、その表情は優しい。

「ったく、酉のヤツ素直じゃねーなあ。好きなら好きっていつちまえばいいのによ」

厨房から卯紺がいう。

「そういう紺兄こそ。紺兄が一番素直じゃないと思うけど」

「いったな、未礎。テメーこそ、さっさと告ったらどうだ」

「俺は別に…。 “あいつ” が幸せなら、それでいい」

未礎はいつてどこか切なそうに両親の写真を見つめた。

「未礎の良いところで、悪いところはどこでしょう」

突然寅之助が出てきていう。

「真面目すぎ、無愛想、笑わなさすぎ、女の子つれてこない、それから…」

「…ちよつと、紺兄。それ何か違う気がする…」

卯紺がいったことに、未礎は呆れ顔でいう。

「でも、やっぱ一番はあれだな」

「あれ？」

「他人のことに気を配りすぎ」

「ピンポーン！」

寅之助が人差し指をたてて笑った。

「卯紺のいう通り。少しは肩の荷をおろしてね。それも大事な事だよ？ そうそう、せめて俺達兄弟の事に関しては、未礎自身を優先していいんだよ」

寅之助がぼんと未礎の頭を叩いた。

「別に兄さん達に気をつかってるつもりはないんだけど、っていうか俺が朝起こさないと、誰も起きてこないじゃないか。他にも、俺がやらなきゃ誰もやらないことだってあるし…しかもたくさん…」

「まーなあ。……やっぱ、名前ってスゲーな」

「…はあ？」

いいながら卯紺は未礎の顔を見た。

突然話が変わる方向へ変わって、未礎は寅之助を見る。

「そっか、まだ未礎には話してなかったっけ。俺達の名前の由来」

「え、俺知らないよ、そんなこと」

未礎がいうと、寅之助と卯紺は笑い出す。

「まずいつとくけど、未礎以外は母さんが名付け親。未礎だけは父さんがつけたんだ。何でかわかるか？」

「わかるわけないよ。このこと酉は知ってるの？」

「いや、たぶん知らないよ。うーん、そうだね、父さんと母さんの性格を一言でいうと？」

「え？母さんは明るい…っていうかおてんばかな。父さんは頼りになる、しっかりした人だよ」

「そうそう。俺と卯紺、それから酉が母さんなのはちゃんと理由があつてね、俺の“寅之助”は寅年生まれだからっていうのと、“寅年の男の子は強い名前にするんだ！”っていう母さんの言葉で付けられたんだよ。それから卯紺は…」

「俺のも卯年生まれだからと、響きがいい“紺”の字の組合せ」

「酉は、上三人が十二支に違う文字をまぜたから、今回は一文字“酉”でいくぞって」

寅之助と卯紺は懐かしそうに話す。

「…それで、結局俺は何なの？父さんが名付けたって、何か理由があるの？」

未礎が聞くと再度二人はクスクスと笑った。

「それがさ、俺ら二人の性格があまりにも頼りなさ過ぎて、名前と合っていないことに気付いたらしいんだ」

「そこで父さんが未礎の名前をつけた。俺達兄弟の“礎”となってくれるように。もちろん、兄弟共通の十二支は入れたけどね。それで今、未礎がちゃんと父さんの想いを受け継いでいるんだ」

幼い頃から天然だった寅之助、しっかりはしていたが、何をするにもてきとうな卯紺。

そして三男目の未礎が、その二人、そして弟を支えているのだった。

「だからほら、よくいわれんだろ？未礎は父さん似だって。顔は四人とも父さんと母さんバランスよく似てるって感じだけど、性格はな」

「間違いなく、みんな母さんと父さんの子供だけだね。って、それはいいとして、だから未礎は頑張りすぎないようになってことだよ。もっと俺達を頼っていいんだからさ。ね？」

「…ありがとう、寅兄紺兄。…ところで酉は？」

ふと気が付いて見ると、長々と三人でしゃべっていた。

酉の姿が見えない。

「ごめん酉、一人でやらせて…。…どうしたんだよ、アリス」
急いで酉の所へ行くと、そこには一人の少女が立っていた。

少し色素の薄い綺麗な栗色の長い髪と特徴的な綺麗な翡翠の瞳。
少女、本塚アリス。

未礎の同級生でイタリアと日本人とのクォーターである。

何やら話す二人の姿を卯紺は見守る。

「未礎の彼女も来たのかい？」

「みたいだな。…って、お前いつまでいんだよ」

「何だい、私がいちゃマズイのかい？」

「あのなあ…」

ひょっこり顔を出した李杜夢に卯紺はいう。

と、その時、未礎がエプロンをはずして酉に何かいうと、上からカ
ーデガンを羽織り、アリスの手をつかみ外へ歩き出した。

「オイ、酉。未礎のヤツ何だって？」

「んー、詳しくはわからないけど、アリスさん困ってたみたい…。
とにかくちょっと抜けてくるってさ！未礎兄もやるう！」

そんなことをいいながら、酉は未礎の出でいった方を見て笑った。

「まあ、少し自由になってくれた方がいいんだけどな。…っていう
か、二時までには帰ってくるんだろうな」

「それは大丈夫だよ。なんだかんだいっても、未礎は結局俺達家族
を優先にするんだから。本当にもっと自由にしていいのに」

寅之助は優しくいつて微笑んだ。

その頃、未礎はアリスの手をとったまま、近くの公園へ来ていた。

「どこにいるんだ？」

「…こっち。ごめんなさい、未礎はお店の手伝いがあるのに、私…
迷惑ばかり…」

「アリスの悪いところは、すぐ謝ることだよ。俺、迷惑だなんて思っ
てないし、逆に嬉しいんだ。アリスが頼ってきてくれること」

未礎は静かに微笑んだ。

笑うことが苦手な未礎の本当の笑顔。

「私も嬉しいん。未礎が笑ってくれると」

そういつてアリスも笑う。

少しだけ頬を赤らめて、優しく穏やかな笑顔。

アリスは本当に静かな女の子だった。

一年前、未礎のクラスに転入してきたアリス。

未礎としては、どうにも放っておけない感じがして、世話をやいてしまう。

それと同時にアリスの前でだけは、素直に笑う事ができた。

アリスの前でなら、心が解放された感じだった。

この気持ちをなんと呼ぶべきか、未礎にはまだわからない。

「…この子なの」

アリスがそつと茂みをかき分けると、そこには段ボール箱があった。未礎は近付いて覗き込んでみると、その中で何かがモゾモゾと動く。

「うわ、まだ小さいじゃん。…可愛いな」

未礎の手に抱き上げられたそれは、耳がチョココンとたれて体は黒だが手足の先が足袋をはいたように白い、小さな仔犬。

未礎の表情はまた優しく笑っていた。

『未礎、犬好きだもの。それに誰にでも平等に優しくて、未礎のそんな笑顔好きだよ?』

「お前、うちくるか?」

「え、でも、未礎、お兄様達が…」

「平気だよ。家族みんな動物好きだし、それにお前も家族欲しいよな」

仔犬はクウと鳴いた。

まるで、未礎に応えるように。

「未礎……」

「何、しょぼくてんだよ、アリス。まあ、だいたい予想はつくけ

ど。アリスが気にすることないって何度もいってるだろ？」

未礎は片手で仔犬を抱えて、もう片方の手でアリスの頭をポンツとたたく。

「ほら、帰ろう」

「うん」

未礎とアリスは並んで歩き出した。

“えとの丘”に帰る途中、二人は仔犬の名前を考えていた。

「“戌”だろ？俺達兄弟にはいないから、母さんならきつと……”

戌吹“…だろうな”

未礎はクスツと笑う。

「うん、ピッタリ。“えとの丘”の新しいメンバーね」

アリスもつられて笑った。

仔犬、改め戌吹もアウツと鳴いた。

menu☆5

二人と一匹で“えとの丘”の前までやってきた。

「ただいま」

「おかえり！未礎兄もなかなかやるね！……“戌”だー！」
一番に出迎えた酉が叫んだ。

「何だよ、やっと帰ってきたのかよ……って、おい」

「もつとゆっくりしてきてよかったのに……うわー！ちっちゃい！」
卯紺と寅之助も出てきて叫ぶ。

「ダメかな、うちに置いちゃ……」

すでに兄弟の手の中をいったりきたりしていた戌吹を見て未礎は
いった。

クウン。

ちょうど卯紺の手の中にいる時、戌吹は鳴いて卯紺を見上げる。

「あ、あの、すいません。私が見つけたんですが、母が動物苦手
……」

アリスは申し訳なさそうに頭を下げる。

そんなアリスと自分の手の中の子犬を交互に見て、卯紺はいった。

「母さんのいうと、こいつは“戌吹”だな。ちょうどいいじゃね
ーか。酉も弟欲しがってたわけだし」

「うん！やったね！ありがとう、アリスさん！」

「え、あの……」

勝手に話が進行してしまって、アリスはついていけないでいた。

「ほら、うちの家族は大丈夫だっていったらる？」

アリスの頭を撫でながら、未礎は小さく笑う。

不安顔だったアリスもやっと笑顔を見せた。

「……うん、さすが兄弟……ね」

未礎と卯紺を見つめながら、呟くようにいう。

『未礎と卯紺さんの発想、まったく同じ。お互いのこと、ご両親の

こと、しっかり理解してるのね』

そう思うと自然と気持ちが優しくなる。

「アリスちゃん、せっかくだからお茶飲んでいきなよ」

「いえ、そんな、いつもご馳走になっているのに、申し訳ないです！」

寅之助の提案に、アリスは首を横にふる。

「飲んでいけよ、アリス。俺がいれる紅茶だけど、それでよければ」

「未礎の紅茶、とてもおいしいよ。でも、やっぱり迷惑……」

「じゃあさ、アリスさんケーキ作ってよお！」

「お前“じゃあ”って何だよ」

未礎とアリスで話していると酉と卯紺が会話に入ってきた。

「けど、まあ、もし時間あるなら、久しぶりにアリスのケーキ食いてーな」

アリスの顔を覗き込みながら、卯紺は楽しそう、もといいたずらにいう。

「時間はぜんぜん平気ですが…、あの、本当にご迷惑じゃ！」

慌て卯紺にいいながら、表情はどこか不安顔。

そんなアリスの前に酉がピョコツと顔をだした。

「いいのお?! やったあ!」

満面の笑みでいった酉は、本当にかわいらしい。

その笑顔にアリスもそっと笑いかける。

「こらこら、卯紺も酉も勝手に決めちゃダメだよ」

困った笑顔で寅之助はいう。

「アリスちゃん、卯紺と酉はあんなこといってるけど、本当に迷惑じゃなければ、お願いしてもいいかな」

「いえ、私は全然迷惑などではなく……!」

「アリス、落ち着いて。寅兄いってること、なんかめっちゃだし…。っていうか、アリスにとって迷惑じゃなきゃ、それでいいんだ」

ポンッとアリスの頭を叩きながら、未礎はそっという。

「うん…。では、お作りしますね。えっと、今回は何がよろしいですか？」

アリスはそっと微笑むと、酉に目線を合わせてそういった。するとパツと酉の顔が明るく笑う。

「僕、紅茶のシフォンケーキがいい！」

酉がそういつてアリスにくつついた。

「おい、酉。人の女に手え出すな」

卯紺が酉の首根っこを掴む。

「紺兄、別に俺達付き合ってるわけじゃないし…」

未礎はため息をつく。

そんなやり取りにアリスは小さく笑っていた。

その笑顔がどこか寂しように映ったのは、卯紺の瞳。

『つたく、あのバカ』

未礎の方へ視線を移し、卯紺はそっと呟くように口を動かした。

アリスが厨房へ入ると卯紺は未礎の背を押す。

「おら、テメーはアリスを手伝え」

「わかってるよ、いわれなくても」

「なら、さっさと行け」

どこかつまらなさそうに卯紺はいう。

朝と昼のちょうど間の時間帯。

お客もそこまで多くはなく、落ち着いて過ごすことができる。

だからこそケーキ作りをリスに頼んだのだ。

アリスの横に立ち、粉を篩にかけながら、未礎はため息をつく。

「つたく、紺兄ってば」

「優しいお兄様ね」

アリスが笑顔で応える。

「確かに優しいけど…。とにかく、作っちゃおっか」

「うん！」

やや複雑そうな表情のままの未礎にアリスは優しい笑みでいった。

『いけないよ、紺兄。どんなに想っていても、俺の一番は家族だか

ら』

そんなことを考えていた未礎を厨房の外から酉が見ていた。プクーツと頬を膨らませる。

「未礎兄こそ、さっさと告白するべきだよ。アリスさん絶対に待ってるんだから！」

「しょうがないよ、酉。未礎にも何か考えがあるんだから、そっとしておいてあげよう」

「でもお」

寅之助が優しく笑うと酉はつまらなさそうに唇を尖らせた。

『……俺達のこと優先してなきゃいいけどな。……まあ、あいつには無理な話だろーけど』

寅之助と酉の会話を聞きながら、卯紺は未礎とアリスを見る。

仲良くケーキを作る二人の姿に、卯紺はどこかもやした気分で表情を歪ませる。

好きあっていることは確かであるのに、互いが互いを想って、あえてそれを口にしない。

いや、できないのだった。

「いつもごめん、アリス」

「私の方こそ、いつもご馳走になって……」

「……いいんだ」

ふと見せる未礎の顔は、どこか切なく儂い。

『俺が謝りたいのは、それだけじゃないからさ』

それを誤魔化すようにアリスの頭を撫でる未礎。

背の高い未礎をアリスは頬を染めつつ見上げた。

未礎の持つその不器用な笑顔や優しさがアリスにとっては何より嬉しい。

何より大切に愛しい。

そっと微笑んだアリスに未礎も笑いかけた。

それからおよそ一時間が過ぎた頃、ようやくケーキが焼けた。

オーブンを開けると空気によってフワリと紅茶の甘い香りがただよ

う。

酉の希望通り、紅茶のシフォンケーキだ。

「わーい！やったあ！」

焼き上がったケーキを見ながら、酉が目を輝かせる。

「お口に合えばよいのですが…」

「大丈夫！アリスさんが作ってくれるのは全部おいしいから！」
不安そうに呟くアリスの横で、酉は早く食べたそうにいった。

「焼き立て、お味見してみますか？」

アリスがそつと笑うと、酉は目を輝かせて頷く。

パクツと一欠片口にして幸せそうに笑う酉に、アリスも微笑んだ。
と、寅之助がひょっこり顔を出す。

「それじゃあ、ちよつと休憩しようか。ちようどお客様もアリスちゃんだけになったし」

穏やかな笑顔でいうのは寅之助だ。

「フツー客にケーキ作らせねーよ」

そんな寅之助に呆れ顔なのは卯紺。

「はあ…」

もはやため息しかでないのは、いうまでもなく未礎だった。

四兄弟の言葉にアリスはクスクス笑う。

それぞれの性格がかし出すこの雰囲気。

優しく温かい。

「本当にごめん。アリスはもう座ってていいから」

「手伝うわ」

「いいから座つとけて。これ以上迷惑かけたくないんだよ」

「……うん、わかった」

アリスはいつて困ったように笑った。

未礎の性格をよく知っているからこそ、これ以上はいわない。

「アリス、こっちこい」

卯紺がそういつてイスを引いた。

「え、あの…」

「どうぞ！アリスさん座ってください！」

酉がアリスの手を取り、卯紺の元へエスコートする。アリスは戸惑いつつ、椅子にかけた。

タイミングよく、卯紺はスッと椅子を押す。

「あ、あの…ありがとうございます。…すいません」

「謝ることないよ」

寅之助が優しく微笑んだ。

その後ろから未礎がポットと人数分のカップを運んでくる。

「お待たせ。はい、アリスの紅茶」

「ありがとう」

紅茶の水面に小さく映る自分の顔。

どこか哀しそうに見える。

『ダメ、隠さなきゃ…。私の気持ち…みんなに気付かれないように…。…これは私のわがままなのだから…』

兄弟にもカップを配る未礎に、アリスは小さく笑みをこぼす。

「未礎のいれてくれた紅茶飲むの久しぶりだね」

「未礎はたまにしかいれねーからな」

「未礎兄のいれた紅茶すごく美味しいんだよね！僕大好きなんだ！」
酉がアリスにそういつて笑って見せた。

「…私も…大好きです」

それに応えてアリスも笑った。

『好きなのは紅茶だけじゃないのに。アリスさんは未礎兄のことを気遣ってその気持ちを隠してるのかな。そんなの…間違ってるよ。』

…なんて口に出したら、紺兄がキレそう…』

酉はそんなことを考えながら、微笑むアリスを見つめた。

「酉」

「うあ！はいっ！」

未礎に急に呼ばれた酉は焦って返事をした。

「何キョドってんだ？」

そんな酉に卯紺は呆れぎみに聞く。

「な、なんでもない！それより、何未礎兄？」

「ケーキ取り分ける皿、用意してくれる？」

「ああ、皿ね！うん、了解！」

何か誤魔化すように笑って皿を取りに行く西に、未礎はふと不思議に思った。

けれど、深くは考えない。

というよりは、軽く感付いていた。

あえて何も聞かずに、未礎は丁寧にケーキを切り分ける。

「おいしー！」

「ホント、美味しいね」

「アリスには才能があるんだ。中学卒業したら、ここでバイトしろよ。アリス目当ての客が増えるぞ」

卯紺がそういつていたずらな笑みを見せた。

「こーんーにーいー。頼むからアリスに迷惑かけないでくれ」

アリスのケーキを食べながら好き勝手にいう卯紺に、未礎はため息混じりにいう。

「何だよ、未礎。お前だって嬉しいだろ？」

「：それは」

未礎はいいかけてやめる。

嬉しくないわけがない。

ただ、それは素直に口に出してはいけない気持ち。

卯紺は未礎が考えていることを察しつつ、なんとも複雑な表情で未礎を見る。

「私が高校生になって、その時皆様が必要としてくださったなら、私は喜んでお引き受けします」

未礎と卯紺を見てアリスは微笑む。

『迷惑だなんて。私は嬉しい。未礎の傍にいられるのだから』

そっと未礎のいれた紅茶を口に含む。

広がるのは、優しいフルーツの香り。

それはアリスの一番好きなフレーバーだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2742/>

えとの丘

2011年10月9日16時58分発行